

はんにやしんぎょう
『般若心経』について (六)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (4)

6. 「受想行識、亦復如是」について

直前の文では、私たちの身体を構成する五蘊のうちの物質的要素である「色蘊」が空なるものである、すなわち、本体を欠いている、ということを説きました。続いて、五蘊のうち他の4つの蘊もまた同様に空なるものである、ということを説いています。

五蘊の中で「色」以外の4つは、いずれも人間の心のはたらきを表したものです。5世紀に活躍した、インド仏教を代表する学僧の一人である世親 (ヴァスバンドゥ) による仏教哲学綱要書『阿毘達磨俱舍論 (以下『俱舍論』と略します)』に従って「受想行識」のそれぞれを見ていきましょう。訳は櫻部建先生の『俱舍論の研究』pp. 165-167を参考にしています。

まず「受」とは「感受」のことです。『俱舍論』によれば「楽・苦・苦でも楽でもない、という三種の感じの受容」で、6つの感覚器官ごとに6つの感受があります。つまり対象を感覚器官が感じ取ることです。リンゴを見てリンゴだと認識する場合、まず始めに何らかの色と形と香りの集合を私の認識器官が受け取ります。これが「受」です。この時点では単に感じ取っただけで、リンゴの赤い色とか丸っこい形とかの識別は行われていません。

次に「想」は、「受」によって感じ取った対象に対して識別するはたらきです。『俱舍論』では「青・黄色、長・短、女・男、友・敵、楽・苦などにわたって、[対象の] ありかたを [心] に 把握すること」と説明されています。感じ取ったリンゴに対して、この対象は「赤い色」「丸っこい形」「良い香り」を具えていると識別します。これが「想」です。「もともと初期的な、まだ明確な認識になっていない観念」・「初期観念」とも言われます (立川武蔵『般若心経の新しい読み方』p. 8, p. 121)。

「行」は意味の多いことばですが、ここでは「受・想・識」以外の心のはたらきをすべてまとめて「行蘊」と言います。『俱舍論』では「色・受・想・識の4つ [の蘊] 以外の行が行蘊である」と説いています。「行が行蘊だ」では説明になっていないように思えますが、「4つの蘊以外の行」というときの「行」は「造作」とも説明されており、「作り出されたもの」を意味します。「諸行無常」と言うときの「行」です。五蘊はすべて「作り出されたもの」ですが、心のはたらきに関連して言えば、「感受 (受) ・ 識別 (想) ・ 了知 (識) 以外の心のはたらきすべて」が行蘊である、ということになります。対象に対する心のはたらきかけ、という意味で「意志」とか「意志的形成力」と説明されたり (中村・紀野『般若心経・金剛般若経』p. 22)、あるいは「精神的慣性 (立川武蔵p. 8)」、「記憶力などの作用 (宮元啓一『般若心経とは何か』p. 87)」とも訳されます。「想」によって「赤い色をしている」と判断した対象に対して、自分の心の中にある赤いものとの記憶と結び付け、リンゴへと心の方向付けを行う、という一連の心のはたらきを表しています。

「識」は、『俱舍論』によれば「対象を一つ一つ認識せしめること、すなわち了知すること」です。六種の認識作用が六種の対象を認識するはたらきの総称 (中村・紀野p. 22) とされますが、一方では、一連の認識の終点としての「判断作用」 (宮元啓一p. 87) とも説明されています。また「言語による概念作用、はっきりした概念のかたちをとって認識

される場合」の「認識」のこととも言われます（立川武蔵p. 121）。「対象が何であるかを確定してそれであると知ること」と言えるでしょう。つまり、目の前にあるリンゴという対象が、リンゴであると知ることです。

これら「受想行識」の4つの蘊もまた、先の色蘊と全く同じである、と言うのです。つまり、「色即是空」のくだりで見たと①AB、②AB、③ABのような形の文章が、「色」のところを入れ替えて、これら4つの蘊すべてにもあてはめられるわけです。

『般若心経』では、言葉を尽くして五蘊がみな空であると説くことによって、何を述べようとしているのでしょうか。一つには、私たちの存在を構成している五蘊がすべて本体を持たない、実体の無い存在であること、従って人間の心身は永遠に存続し続けるものではないことを主張しようとしたものと言えます。もう一点は、実質的には同じこととなるのですが、インド伝統派の主張する「恒常不変のアートマン」という個体の本質は実在しないことを立証する意図があったと考えられます。

インド伝統派の哲学では、私たち一人一人に個体の本質であるアートマン（我・個我）があり、それは恒常不変であると考えます。輪廻転生によって生存形態は様々に変わりますが、どのような生き物の形をとっても、個体の本質アートマンは輪廻の主体として永久に存続し続けます。そしてこのアートマンは、宇宙の根本原理であるブラフマン（梵）と本質的に同一であると考えます。インド哲学の根本思想として取り上げられる「梵我一如」という言葉は、根本原理ブラフマンと、個体の本質アートマンとは、根源においては同一であることを示しています。しかし仏教は、すべての存在は原因と結果の繋がりの中で相互依存的に存在しているに過ぎない、という「縁起」の思想を説きます。この立場では、恒常不変の個体の本質は認められません。「無我説」ということになります。

仏教哲学においては「無我」をどのように論証するか、ということに心を砕いています。インド仏教において最も有力な学派であった説一切有部では、存在しているものをすべて数え上げて「五位七十五法」という説を立てました。5種に範疇分けされる総計75の「法（存在）」のみが実在しているすべてである、と言うのです。『俱舍論』ではそれらが詳しく説明されています。その75の実在の中にはアートマンは含まれていない。従ってアートマンは実在しない、ということになるわけです。「あるものが存在しない」ことを論証するために、存在するすべてを数え上げて、その中には含まれていないことによって「あるものが存在しない」ことを立証する、というやり方です。

『般若心経』が「五蘊皆空」「色即是空」「受想行識亦復如是」と説く時、五蘊すなわち人間存在の一切がみな空であること、実在しないことを言っているのはもちろんですが、また同時に、インド伝統哲学において人間の心身に想定される「恒常不変のアートマン」の否定も意図されているのではないのでしょうか。

[参考文献]

櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館,1969,1975.

立川武蔵『般若心経の新しい読み方』春秋社,2001.

中村元・紀野一義訳注『般若心経・金剛般若経』ワイド版岩波文庫,2001,2005

宮元啓一『般若心経とは何か ブッダから大乘へ』春秋社,2004.